

方々にご支援をいただいた。大道粘土の採掘現場や精製工場の見学や試料採取については長沢陶土(有) 福田忠孝氏及びブルドーザー興産、小林 豊氏にご協力を賜った。萩焼岡田窯の岡田 裕氏には窯の見学を快諾され、粘土試料を提供して下さった。同じく城山窯の金子 司氏には古萩美術館を見学させていただくとともに作陶についてお教えいただいた。さらに、長沢窯原田隆峰氏にも萩焼についてあれこれとご教示いただいた。以上の方々から謝意を表します。

参考文献

- 原田進造(1996): 山口県萩穂地域の大道土の研究。山口地学会誌, 第36号, pp.7-16.
 工業技術連絡会議窯業連合会(1978): 日本の窯業原料, 879p.
 工業技術連絡会議窯業連合会(1992): 日本の窯業原料, 912p.
 河野義礼・植田良夫(1966): 本邦火成岩類のK-Ar dating - 西日本日本の火成岩類, 岩鉱, 56, 191-211.
 松尾征二(1999): 山口県瀬戸内沿岸中央部における更新世後期末の堆積物。山口地学会誌, 第43号, pp.1-8.
 坂田泥華(1979): 日本の陶磁, 萩, カラーブックス, 保育社, 152p.
 下坂康哉・中山勝博・倉林三郎(1990): やきもの用粘土をめぐる - 木節粘土・蛙目粘土を中心に -, アーバンクボタ, pp.48-64.
 高橋英太郎・河野通弘(1975): 第四系, 山口県の地質, 山口県立山口博物館, pp.205-222.
 吉賀大眉・神山典之(1986): 日本のやきもの4「萩」, 淡交社, 200p.
 渡辺茂樹(1999): 李勺光・李敬のいた風景, 萩焼のルーツを訪ねて, 講談社出版サービスセンター, 374p.
 山口県(1968): 山口県地質図, 1:50,000, 33p.山口県.
 山口県(1972): 5万分の1土地分類図「小郡」, 山口県.
 山口県(1972): 5万分の1土地分類図「宇部東部」, 山口県.

註) 大道と台道, 地名の由来

萩焼の原料粘土「大道粘土」が賦存する地域は「大道」あるいは「台道」と呼ばれてきた。一体どちらが本当なのだろうか?

現在, 地名「台道」は防府市西端の大字名として国土地理院発行の5万分の1地形図「防府」および「小郡」にも表示されている。一方, 「大道」は山陽本線「大道駅」や学校名として用いられている。

また, 萩焼に関するいくつかの書籍には, 粘土原料名, 産地として「台道」が採用されている例も多い。例えば, 坂家四代新兵衛が材料支給を申請した古文書(1732)には, 「一, 台道土八俵」と記され(坂田泥華, 1979), さらに, 明和8年(1772)の御用物諸控, 坂新兵衛の文書中(吉賀・神山, 1986)にも台道土が数回用いられている。

角川日本地名大辞典によれば, この付近は文禄・慶長の役のときに「台道」と命名された。以後, 台道村と呼ばれたが, 明治22年に台道村と切畑村との合併により大道村となった。大道村は昭和30年防府市に編入され, 「台道」と「切畑」が大字名として残され, 駅や学校の名称には両大字を代表する「大道」の名が残されたようだ。

KAMITANI Masaharu and SUDO Sadahisa (2001): "Hagiya-ki" porcelain and it's raw clay.

< 受付: 2001年4月23日 >

話題

鉱山地質学の先達「高島北海」

萩焼の探訪中, 萩城(指月城)の南にある城山窯の敷地内に「高島北海」の生家門が保存されていることを知った。「高島北海(1850~1931)」, 彼は明治時代に活躍した地質学者で, 林学者, 画家としても知られる人だ。ここで「高島北海」について紹介してみよう。

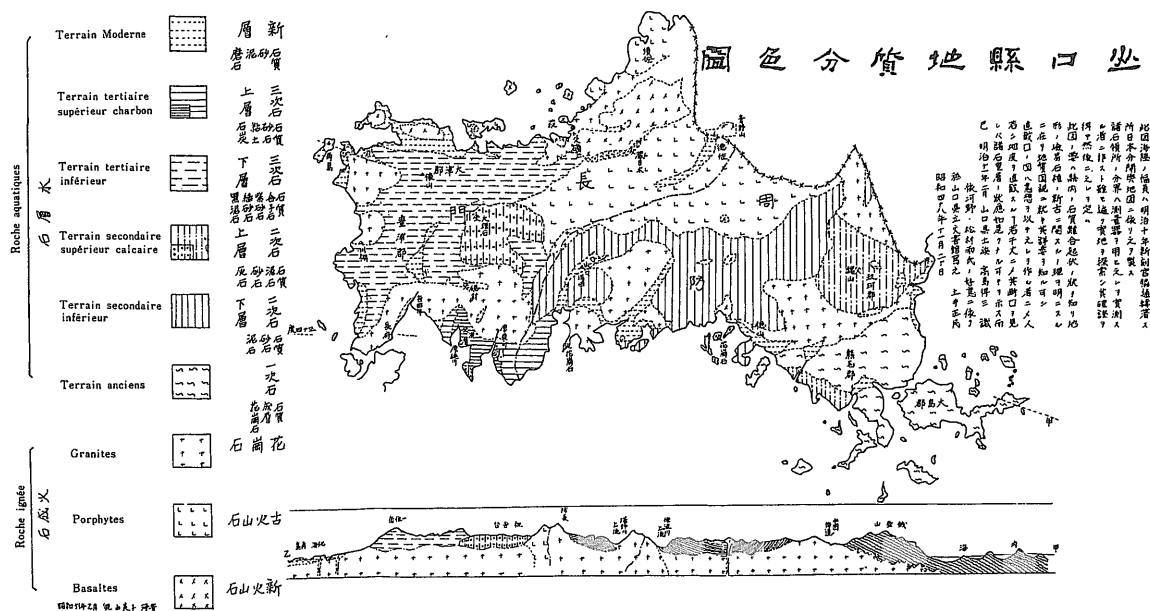
地質学の先達: 高島北海は長門国阿武郡萩江向村(今の萩市江向)に藩医「高島良台」の次男として生まれた。明治5年(1872年)工部省鉱山寮(局)に技師として採用され, 政府直轄「生野銀山(兵庫県)」に設置された鉱山業の近代化のための修学実験所に入り, フランス人鉱山技師コワニール

から鉱山学の教育を受けた。明治7年には生野から萩までの往復において「山陰・山陽土質(地質)記事」を著し, さらに山口県の依頼で地形・地質・鉱石の調査を行い, 明治11年(1878)に山口県地質図説・同地質分色図として提出した(付図参照)。これらの地質記事や地質図は明治期になって日本人による最初の地質観察記録であり, わが国の地学史上その功績は高く評価される(土井, 1978, 1986)。

林学者へ転身: その後, 北海は農商務省地理局の傭として, 日本全国の森林調査のみならず, ヨーロッパ各地に派遣され, 林業の指導者として活躍



写真は萩城(指月城)の南、城山窯の敷地内に移築保存されている「高島北海」生家の門。



図は山口県地質分色図。土井正民(1978)による。山口県立文書館所蔵を故土井正民広島大学教授が写し取ったもの。

した。この間、各地の風景のスケッチ・山水画を多く残している。

そして日本画壇へ：明治30年(1897)職を辞し、旧制中学校でを教鞭をとった後、53歳で日本画壇にデビューした。山水画の創作に科学的根拠を与えようとし、「地質と画山水の関係」などについて講演している。常に自然を愛し、真摯な観察と、その美を地質学、植物学、動物学等を通じて理解すべきだという彼の考えは著書「写山要訣」や「東洋画について」に記されている。

昭和6年(1931)82歳で没した。

文 献

下関市立美術館(1986)：高島北海展，下関市立美術館，207p.
 井上 誠(1986)：高島北海論-その生涯と画業-，高島北海展より，
 下関市立美術館，p.162-173.
 土井正民(1986)：地質学の先駆者・高島北海，日本初の地質図作成，
 高島北海展より，下関市立美術館，p.174.
 土井正民(1978)：我が国の19世紀における近代地学思想の伝播とその萌芽，
 広島大学地学研究報告，第21号，170p.

(神谷雅晴)